

日本渡航記

映画文学人生論

ゴンチャーフ『フレガート・パルラド』(1855)

「世界周航記抄」

「日本におけるロシア人」

高野明・島田陽訳 「日本渡航記」

米川正夫訳 『オブローモフ』(1843)

高野明・島田陽訳 『オブローモフ』(2007)

私にとつては、もはやこの極東はさしあたり極端な退屈以外の何ものでもない！

ゴンチャーフ作『オブローモフ』は十九世紀ロシアの貴族階級の無為、頹廢ぶりを描いた小説として知られている。

オブローモフはなまけ者で、朝十時近くになっても起き出さず、ベッドでぐずぐずしているような男だ。そこへ来客があると、「近よっちゃいけません。近よっちゃいけません、あなたは寒いところから来たのだから！」という。

性格はおだやかで、知性と教養があるので、人には好かれるが、行動力がとぼしい。ツルゲーネフの『ルーヂン』とともに、インテリの弱さを特徴とする余計者、無用者の代表的人物だ。

オブローモフもルーヂンも明治時代に二葉亭四迷により日本に紹介された。西洋近代文学の申し子のような人物ではあるが、もともと日本には『御伽草子』の物ぐさ太郎の民話のような無用者の系譜がある。見方によっては、オブローモフやルーヂンのようなタイプは日本文学史の主流とはいえないにしても、有力な支流の典型的人物といえるかもしれない。

しかし、オブローモフ生みの親ゴンチャーフは『浮雲』の作者二葉亭四迷同様、けっしてなまけ者ではなかった。プチャーチンに随行して、幕末の日本にやってきて、日露国交渉にあたっており、その経緯は『日本渡航記』を読めばわかる。

日本渡航記

映画文学人生論

ロシアのプチャーチン提督が日本との条約締結交渉のため長崎に来航したのは一八五三年八月九日（嘉永六年七月十七日）。アメリカのペリー提督が黒船四隻をひきいて浦賀に来航した一ヶ月半後のことである。ゴンチャロフは提督の秘書官をつとめ、こまめに日記をつけて、鎖国中の日本と日本人の印象を記録している。

裏賀に押しかけたペリーが江戸幕府に強圧的な態度をとったのに対して、プチャーチンは紳士的で、幕府のいう通り、長崎でおとなしく幕府の代表がくるのを待った。催促すると、通詞が「江戸から・・・ホ、ホ、ホ・・・沙汰が参っておりますぬ」といって一向にラチがあかない。

忍耐強いゴンチャロフもついに、「私にとつては、もはやこの極東はさしあたり極端な退屈以外の何ものでもない」とぼやくようになった。

十二月四日になってようやく、日本側の代表団が長崎にやってきた。やや膝の曲がった老人筒井肥前守政憲、年の頃四十五歳ぐらいな大きな褐色の目をした聡明機敏な面構えの男川路左衛門尉聖謨、幾分小鳥に似た顔の老人荒尾土佐守成光、まるでシャベルのように無表情な平々凡々とした顔の中年男古賀謹一郎の四人である。

ゴンチャロフの観察。「川路は非常に聡明であった。彼の一言一句一瞥それに物腰までがすべて良識と機知と慧眼と練達を顕していた」。

えみしらがめずるさくらは日のもとの

犬さくらにも及ばざりけり

川路聖謨